

# 図書館を変えるのはあなた

—図書館変革のモーメント—

工学部安全システム建設工学科助手  
守田秀則

唐突であるが、私は大の読書嫌いである。図書館と縁が薄いのは言わずもがなである。このような私でも、これまでに足を踏み入れたことのある図書館数をカウントしてみると数十にのぼる。不覚にも？結構行っているものである。これを読んでいるあなた（特に学生諸君）はどうであろうか。若者の活字離れが指摘されて久しいが、そのような世代といえども、既往の利用図書館数が2桁台に乗っている方が多いのではなかろうか。そこで、各位の行かれた図書館を振り返って頂くと、それぞれに強烈な個性があり、似通った図書館などというものは存在しない、ということに気づくのではなかろうか。そして、その中で、各人がそれぞれに好みの図書館をお持ちなのではなかろうか。確かに図書館は、その外装の面構えに始まって、内装のレイアウト、陳列書籍、利用者層等実に様々である。個性の喪失が嘆かれる世の中ではあるが、どうやら図書館に関しては無縁の話のようである。

さて、この強烈な個性、どのようにして創られてきたのであろうか。私の見る限りにおいて、それは、それぞれの時代背景の中で、利用者と図書館の相互作用によって創り出されてきたとみるのが妥当なようである。すなわち、まず、図書館の個性にフィットした利用者が集う。図書館の方は利用者層及びその利用形態にフィットするように自らを変革していく。このような過程の積み重ね、すなわち、利用者と図書館の相互作用の積み重ねの上に、各図書館独自の、あの強烈な個性が醸し出されているようなのである。

これは、一見、非常に優れた自律機能のようにみえるが、反面、非常に危険な機能でもある。図書館の機能が利用者向きに特化していくということは、同時に、そこで利用者の選別が行われていることを意味する。そして機能が特化すればする程、それに

フィットする利用者も少なくなってくる。かくして、ごく一部の常連客のみが頻繁に利用し、他の多くは蚊帳の外にある、という歪な図書館ができあがる可能性を秘めているのである。これが健全な図書館の姿であろうか。

では、どうすれば良いのか。答えは簡単である。利用者が多様であれば良いのである。そう！これまで図書館にソッポを向いてきたあなた！図書館嫌いのあなた!! 蚊帳の外にいたあなた!!! 図書館へ行ったことのないあなた!!!! まず香川大学附属図書館に足を運んでみましょう。内部を隈無く探索してみましょう。書架にどのような本が並んでいるかザッとみていきましょう。書庫に降りる階段もありますのでお忘れ無く。階段を上がってくる頃には、これを利用しない手はないと思うに至っていることでしょう。そして後は遠慮なく利用するのみです。どんどん利用して、利用者の仲間入りをしましょう。改革意見、購入希望もどんどん出しましょう。そうすれば、附属図書館はあなた向きにシフトしてくるはず。そして、この"あなた"が多くなることこそが、多様な利用者にフィットした、万人のための図書館へと成長していくための唯一の要件なのです。

今、香大生に新キャンパスの設計図を書かせたとして、何人の学生がそこに図書館を書き込むであろうか。ある高名な先生は、「図書館は大学の心臓である」と仰られた。ここでみてきた観点からは「附属図書館は大学あるいは学生を写す鏡である」ということもできる。「トイレをみれば家人が分かる」というが、この場合、「図書館をみれば学生が分かる」、である。不景気で就職難のご時世であるが、近い将来、採用者側が真っ先に附属図書館を見て学生を計る、なんていう怖い話が出てこないとも限らない。そうなった時、香大生は安泰であろうか？